

東京農業大学 拓友会ニュース

第40号・2024年9月30日発行

発行所 **東京農業大学拓友会**

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1

TEL.03-5477-2918 FAX.03-5477-2947

e-mail : takuyu@nodai.ac.jp

<https://www.nodai.ac.jp/academics/int/int/takuyu/>

拓友会総会について

第66期 総会のご案内

第66期拓友会総会については下記の通り対面での実施を予定しております。

ただし、今後予定が変更となる可能性があります。変更が生じた場合は、拓友会ホームページにてお知らせいたします (<https://www.nodai.ac.jp/academics/int/int/takuyu/>)。

総会

1. 日時：令和6年11月2日（土）午前11時～
2. 場所：東京農業大学サイエンスポート5階 国際農業開発学科 学科会議室

お問い合わせ先

E-mail:katsu10@nodai.ac.jp（東京農業大学国際農業開発学科 中曽根 勝重）

Tel:03-5477-2918（東京農業大学国際食料情報学部 事務室）

卒業生の活躍

農業・国際協力に関するキャリアパス

※2024年6月6日（木）9:00～10:30に、東京農業大学世田谷キャンパス1号館131教室において、本学科卒業生の波多野衛氏（拓殖45期）により「在学時の学びと卒業後のキャリアパス」という題目で講演会を開催しました。

農林水産省 輸出・国際局 輸出支援課 波多野 衛（開発45期）

私の家では、ブラジルの孤児院に幼少期から寄付を行っており、途上国においては自分が送ったお金が何倍もの価値になって海外の貧しい人たちの大きな助けになると聞かされていたため、これが途上国に対して意識を持つきっかけ



となりました。次第にお金ではなく、何か貧しい人たちにできることがないかと思ったのをきっかけに、中学生の単純な思考からお金でなければ「食・農業」ということで、農業開発を学びたいと思い、東京農業大学第一高等学校へと進学、その後、国際農業開発学科で途上国の農業について学ぶこととなりました。在学中は、姉妹校である台湾の中興大学への短期留学や、ブラジルの孤児院でのボランティア、農業アルバイト、サークル活動など学業以外にも多くのことに取り組

み、四年間という学生生活を活かして大変有意義な時間を過ごすことができたと言え、振り返っても感じています。また、何故途上国の貧困はなくなるのだろうか、アフリカと中南米の貧困はどう違うのだろうかという疑問から開発経済学に興味を持ち、国際農業開発学研究室（現農業開発経済学研究室）に在籍し、途上国における貧困のメカニズムについて学びました。研究室在籍中は、大田先生、板垣先生、卒業後は高根先生など多くの先生方にご指導頂き、現在もこうして拓友会の一員として母校につながりがあることは大変嬉しく思っております。特に中曽根先生には、先輩として、先生として、研究の進め方、後輩の指導のあり方、農大生の心構えからお酒の飲み方まで多くを教えて頂き、農大で学んだことが今も自分の礎になっていると感じています。

大学卒業後はビジネスで途上国に関わりたいとの思いから、食品商社に就職し、品質管理部門にて、途上国を含めた国内外の農水産物や加工食品の生産から流通・販売の各段階における食の安全の確保のための業務に従事しました。私は2004年に大学を卒業しましたが、2000年以降、食品偽装事件や雪印の食中毒事件、中国産冷凍餃子による中毒事故など、当時は食の安全性に消費者の関心が大きく向けられる一方、商社はメーカーから仕入れた食品を日本に輸入もしくは日本から輸出するという、右から左に流す従来型のビジネススタイルが依然として残っていました。このため、取扱商材に関する食品安全の管理体制を社内構築するという役割を新たに担うこととなり、農産物の残留農薬管理やトレーサビリティシステム作り、加工食品やサプリメントの工場の衛生管理体制確認のための監査、顧客からのクレーム対応などの幅広い業務に従事しました。在職中は途上国を含めて多くの生産現場（ハワイのパイナップル、フィリピンのマンゴー、台湾の枝豆、イギリスのチョコレート工場など）を訪れ、生産

から消費に至るまでのサプライチェーン全体の安全管理を行いました。

その後、やはり国際協力に携わる仕事がしたいとの思いから、30歳目前で会社を退職し、語学力の不足も感じていたことから、イギリスのイーストアングリア大学にて農業開発専攻の修士号を取得しました。大学院は世界各国から幅広い年代、異なるバックグラウンドの人たちが集まっており、講義だけでなくディスカッションやグループワークなどが多くあったため、語学面ではついて行くのが非常に大変でしたが、大学院生活を通じて新たな考え方を学ぶことができました。

イギリスへの留学後は、農業専門の開発コンサルタント企業に就職し、主に国際協力機構JICAの事業を受託して、途上国で農業開発のプロジェクトに従事する業務に携わりました。農業分野の調査案件や技術協力プロジェクトのみならず、前職の経験を活かして食品衛生分野のプロジェクトにも参画しました。中でも、中央アジアのキルギス共和国の「乳品質向上のための食品検査人材育成プロジェクト」では、食品安全管理システムの専門家として、食品工場の監査を行う行政員に対して技術指導を実施し、他の援助機関が実施した研修よりも現場に則した実践的な能力向上に役立ったと喜ばれたことが、この仕事のやりがいを感じたときでした。

その後、約10年間開発コンサルタントの仕事に従事しましたが、年間の約半分は途上国に出張し、現地で専門家としてプロジェクトに関わるというサイクルだったため、子供が小さいこともあり、もっと日本にいられるような仕事に転職することを決意しました。開発コンサルタントとして国際協力に関わっている際、海外の農業に携わっているものの、日本の農業について自分の知見がまだまだ及んでいないと感じており、日本の農業に関わる仕事がしたいと思うようになりました。公務員になるということは全く

想定していなかったのですが、縁あって40歳を超えて全く違う分野である、農林水産省に入省することとなりました。所属は、輸出・国際局の輸出支援課ということで、2030年までに日本の農林水産物・食品の輸出額5兆円という意欲的な目標を達成するため、国内の生産者の支援を行う事業に従事しています。今までは、商社にて食品の輸出入ビジネスの現場や、途上国の国際協力プロジェクトの現場での取り組みに関わる仕事でしたが、現在の仕事は、政策目標を達成するために必要な施策を行い、生産者を支援するという今までの現場寄りの仕事とは異なる内容であり、日々新しい気付

きや学びがあり、自分自身の枠が広がっていると感じています。予算や国会対応など未知のことが多いですが、途上国で培ったコミュニケーション・調整能力と現場での課題解決という経験は、違う分野でも活かされています。

学生の皆さんの中には、既にやりたいことが決まっている人も、まだ何をしたいか迷っている人もいます。異なる3つの分野の仕事に携わってきて思うのは、何ができる自分の今後につながるかわからないので、ぜひ在学中は迷ったらやってみようの姿勢で、色々なことに取り組んでみてください。

2023年度 東京農業大学国際農業開発学科卒業論文 拓友会賞

飛騨地方における地域産広葉樹の家具への活用事例からみる国産広葉樹材の可能性

農村開発協力研究室 古寺 優里

指導教員 杉原 たまえ

古寺優里さんは、森林資源のなかでも製材上の扱いにくさや収益性の悪さから市場価値が低いとされる広葉樹に焦点を当て、国産広葉樹の生産と利用の可能性についての研究に取り組みました。

筆者が、この研究を通して明らかにした点は、以下の通りです。

- ①全国的に針葉樹の拡大造林が進展した中、広葉樹資源の賦存量は、北海道や岩手県に偏在しながらも、全国に一定程度存在する。特に、本研究の調査地である飛騨地域では、森林面積の6割を広葉樹が占めている。
- ②しかし、元々針葉樹に比べて製材効率の落ちる広葉樹は、担い手不足による管理不行届きもあり、飛騨地方での広葉樹製材率は7%程度にとどまり、93%は安価なチップやパルプ材としてしか利用されていない。
- ③そのため、広葉樹を製材できる製材所が、調査地だけでなく全国的にみても極端に少

ないため、さらなる広葉樹の低利用という悪循環をもたらしている。

④こうした状況に対し、飛騨地域では「中間土場」や「広葉樹コンシェルジュ」を設置することで、広葉樹の新たなサプライチェーンを構築し、広葉樹の家具用材としての利用度を高めていった。

⑤さらに、地元の広葉樹の加工・家具類製造業者が、温泉熱を利用した低乾燥技術の開発や小径木を利用した家具の開発などをおこない、企業間での連携がとられるようになった。

⑥こうした連携に加えて、後継者育成事業にも地域全体で乗り出すなど、地場産業の育成につながった。

本論文の優れている点は、次の三点です。

第一点目が、統計データや関連文献を丹念に調べたうえで、調査のために現地に2回足を運び、多様な関係者に積極的に聞き取り調査をおこなった点である。こうした研究課題

に対する地道な姿勢をまずもって評価したい。

第二点目が、飛騨地域での地域内旧型の広葉樹バリューチェーンの構築を、現地調査から得た情報から描き出し、新たな価値を創出する地場産業育成の重要性を指摘している点である。

第三点目が、飛騨家具生産が、輸出志向型産業に転化することによって地域資源の乱伐や枯渇という事態に陥った経験を、途上国の輸出志向型森林伐採による環境破壊と重ね合わせようとしている点である。

受賞者のことば

古寺 優里

この度、令和5年度国際農業開発学科卒業論文に対し拓友会賞を頂けたことを大変光栄に思っております。農村開発協力研究室の先生方、先輩、同期、後輩には大変お世話になりました。感謝申し上げます。

私は、「飛騨地方における地域産広葉樹の家具への活用事例からみる国産広葉樹材の可能性」という題目で卒論を執筆致しました。林業にほとんど触れない開発学科の私が木に興味を抱いたきっかけは、ゼミ活動で屋久島の歴史文化産業を研究する過程で屋久杉の成長過程や国有林政策の歴史に触れ、興味を抱いたからです。一度興味を抱いたものをとことん追求するのが好きである私は、偶然見かけた「飛騨の広葉樹勉強研修会」という広告に惹かれ飛騨市主催の1泊2日研修会に参加しました。私はこの研修で国産広葉樹の材木流通量はスギ・ヒノキに比べ、かなり規模が小さいこと、広葉樹は樹種が多く、種類によって木肌の色・木目などが異なり、ニッチな需要があることを初めて知りました。大径木は伐りつくされ、小径木ばかりの飛騨の山ですが、そこにビジネスチャンスを見出し、飛騨の広葉樹を飛騨家具づくりの素材として活用し、山林育成に還元していくビジョンにとっても関心を抱きました。

研修後は、大学の図書館や国立国会図書館で本を読み漁り、一から林業について

の勉強をしました。戦後の拡大造林で里山の風景はガラリと変わり、経済成長とともに住宅需要は落ち込み安価な輸入材に押され、生活から遠のいてしまった日本の森林の現状はとても悲しいものです。

2回目の現地訪問では、飛騨家具フェスティバルという職人や商材流通に関わる人が集う催しに参加致しました。木一本一本の曲がり・太さの個性を生かした家具づくりの技術と情熱に感化され、私も卒論をより一層気合の入ったものに取り上げることが出来ました。

私は現在、国産木材専門商社に勤務し、熊本に配属され九州の林業を学んでおります。木材流通のビジネスに関わるようになってから林業＝針葉樹、広葉樹＝雑木と捉えられるのが常であることを仕事で痛感しました。だからこそ広葉樹≠雑木と捉え、地域の山に経済的価値を見出す飛騨の方々を今でも応援しております。いつか私もビジネスで広葉樹に関われる日が来ると大変うれしく思います。学生時代に培った、フットワークの軽さを武器に日本の林業の問題を解決していきたいです。学生時代に見たもの・ふれたものは、いつかの自分に生きてくると信じています。農大生であることを心から誇りに思い、学びの機会を下さった先生方、開発学科の皆さんに感謝申し上げます。

今年度で退職する教員の挨拶

入学と入塾

中西 康博

私が本学農業拓殖学科(国際農業開発学科の前身)に入学したのは、今から47年前ということになる。だからあいまいになった記憶も多々あるが、明らかなのは、入学式の数日前に、「農業拓殖同志会」なる団体が営む、今は無き、とある合宿所に既に私は入居していたということだ。

その合宿所は、小田急線愛甲石田駅(伊勢原市)の北方、徒歩20分くらいの場所にあり、「志雄(しおう)塾」という名が付されていた。建物は、近隣農家が所有するかつての牛小屋で、それを私よりも十数年年長の先輩たちが「リフォーム」したという。床面積は60坪ほどであったろうか、板敷きの食堂、畳の大部屋・個室・団欒室や、土間の台所、薪で沸かす風呂などがあり、外には廃鶏十羽程度を養う鶏舎もあった。

この塾は、大学などに進学するための一般的な学習塾ではもちろんなく、南米などの海外へ農業移住を夢に抱く「同志」が集い、移住前に培うべき、農業技術や農家経営などに関する諸事を、大学に通いつつ習得しようというマニアックな者たちが、自主的に運営する場所であった。

なぜそのような存在を知ったかという、それは至って明白で、当時、農業拓殖学科に合格した受験生のすべてに、そこからの「入塾案内」が届いた。それは合格者リストを志雄塾の学生が入手できたからで、もちろんその行為は、今では許されざる行為であろう。いずれにしても、その案内状に記された内容が、極めて魅力的であると私は感じたことから、入塾することを即断した。

しかし、魅力的と感じた案内状の中身は甚だウソに近いものであったことに、入塾後たちまち気づかされることになった。その事例を挙げれば暇がないが、例えば、「春には楽しいハ

イキング」と記された件である。その実態は、4月中旬に開催された入塾新歓コンパでしこたま酒を吞まされた翌日に行われた、塾に近い大山(標高1252m)への「駆け足登山」であった。その日、暗いうちに塾を出立し、3時間ほどを徒歩行進した後、中腹あたりからは「走れ!」の掛け声のもと駆け足で昇ることを強いられ、登山後は、頂上近くの大山阿夫利神社の境内で、農大の学歌や応援歌などを「実演」させられるというものであった(学歌などはそれまでの夜間「特訓」により歌唱演舞できるようになっていた)。

当時、畑5反と水田5反もあった農地での作業時間は毎日、夏季は朝5時からの2時間、冬季は6時からの1時間に、加えて、日曜祝祭日は終日であった。さらに下級生のルーティンワークには、交代での炊事当番で、十数名いた塾生の夕食と翌日の朝食を一人で賄わなければいけなかった。だから入塾したとたん、「だまされた」とひどく後悔したものであるが、経済的理由で私大入学を許さなかった親を説得してのことであったから、腹をくるしかなかった。腹を決めればどうにかなるというものなのか、そうこうするうちに、入塾以前は農作業未経験で、料理はカレーライスくらいが関の山であった私が、種々の野菜やイネの栽培がそれなりにできるようになり、安くて早く作れる料理のレパートリーも増えた。また農作業に慣れ始めたころから許されたアルバイトを通じ、土木



や建築に関する比較的高度な作業もできるようになっていった。

大学卒業とともに私は塾を去り、その後、鳥取での大学院生活と、パプアニューギニアでの青年海外協力隊経験を経て、本学に教員として奉職した。教員生活の半分強を過ごした宮古島では大学農場や近隣農家などでの作

業や研究が主体であったし、世田谷キャンパスにおいても主な調査・研究対象は、農地やマングローブ林(写真は西表島)、サンゴの海などのフィールドであった。

いま改めて振り返ると、志雄塾への入塾が、その後の私の人生を大きく左右したなとしみじみ思う。

開発学科での教員生活を振り返って

山田 隆一

2015年にJIRCAS(国際農林水産業研究センター)より東京農大に着任し、以来10年間にわたって国際農業開発学科でお世話になりました。

この間、様々な経験をさせていただきました。研究、教育、学内業務と主に三本柱がある中で、自分自身が最も力を入れたのは教育であったと今になってあらためて感じています。

着任当初は、満足のいく授業がほとんどできず、学生にも迷惑をかけたし、自分自身も情けない気持ちになっていました。それが、4年目あたりから、ようやくまともな授業が徐々にできるようになりました。そこから、教育の面白さを感じ始めました。農村開発協力研究室の中では、アジア班、地域班、農政班などの班を担当し、それぞれの班で週1回のゼミを開いて学生とともに様々な議論をしましたが、とても楽しい時間を過ごすことができました。学生が学ぶことがあるとともに、私も学ぶことがたくさんありました。研究室のゼミ活動は、参加型開発の理念と同様に、正に相互学習の現場であったのではないかと今思い返しているところです。

さて、他方で、研究の方は思うように進みませんでした。専攻主任としての3年間のお務めを終えた2021年度以降、



キューバ・ハバナ市内の農産物市場



ミャンマー・イェジン農科大学での講演

ようやく自身がやりたい研究(これまでの研究の総まとめ)を行えるようになり、充実した日々を送ることができました。その研究の中では、特に農業経営学、ファーマーリングシステム論、参加型研究・参加型開発などについて、その実践経験(主として、ベトナム、ラオス、タンザニア、およびモザンビークでの研究・開発の実践経験)と既存理論とを突き合わせて検討することに主眼を置いてきました。その中で、国際協力に真に貢献できる実践的な農学を展望すべく、研究を積み重ねてきました。

最後に、これまで10年間にわたって、学科や学部の様々な先生方そして農大の職員の皆様方に大変お世話になりました。そして、学問について、教育について、そして人生についていろいろと学ばせていただいたことをあらためて心より感謝申し上げたいと思います。

そして、この10年間に出会った多くの学生・院生と様々なコミュニケーションをしてきたことが貴重な経験であったし、大切な思い出となりました。すでに卒業して多方面で活躍している卒業生が時々農大を訪ねてくれますが、変わらぬ素直さと明るさと逞しさとで頑張っている様子を確認でき、とてもうれしく思っています。

農大は、実学主義で有名なことは言うまでもありませんが、それだけでなく人間的な繋がりを非常に大切にする大学であることを実感しています。農大で働くことができたことは本当に幸せでしたし、一生の誇りにしたいと思います。

10年間、大変お世話になりました。ありがとうございました。

第64期 会計収支決算
(令和4年10月1日～令和5年9月30日)

一般会計

収入の部	予算	決算	差異
1. 会費	720,000	635,000	▲ 85,000
卒業生	720,000	635,000	▲ 85,000
既卒者	0	0	0
2. 事業	50,000	130,000	80,000
ニュース広告	50,000	130,000	80,000
行事等収入	0	0	0
3. 寄付金等雑収入	10,000	39,011	29,011
4. 前年度繰越	702,139	702,139	0
合 計	1,482,139	1,506,150	24,011

支出の部	予算	決算	差異
1. 事業支出	550,000	236,040	▲ 313,960
総会費	0	0	0
新入会員歓迎会費	200,000	0	▲ 200,000
ニュース発行	120,000	106,040	▲ 13,960
拓友会賞	50,000	0	▲ 50,000
在校生への補助	180,000	130,000	▲ 50,000
2. 管理費	285,000	12,820	▲ 272,180
会議費	60,000	0	▲ 60,000
印刷費	5,000	0	▲ 5,000
交通費	20,000	8,000	▲ 12,000
通信費	50,000	0	▲ 50,000
消耗品費	50,000	0	▲ 50,000
雑給費	50,000	0	▲ 50,000
雑費	50,000	4,820	▲ 45,180
3. 特別会計積立金	200,000	200,000	0
4. 予備費	447,139	0	▲ 447,139
5. 次年度繰越金		1,057,290	1,057,290
合 計	1,482,139	1,506,150	24,011

特別会計

収入の部	予算	決算	差異
1. 前年度繰越	3,225,047	3,225,047	0
2. 一般会計より繰入	200,000	200,000	0
3. 雑収入	50	41	▲ 9
合 計	3,425,097	3,425,088	▲ 9

支出の部	予算	決算	差異
1. 次年度繰越金	3,425,097	3,425,088	▲ 9
合 計	3,425,097	3,425,088	▲ 9

第65期 会計収支予算
(令和5年10月1日～令和6年9月30日)

一般会計

収入の部	第64期	第65期	差異
1. 会費	720,000	795,000	75,000
卒業生	720,000	795,000	75,000
既卒者	0	0	0
2. 事業	50,000	200,000	150,000
ニュース広告	50,000	0	▲ 50,000
行事等収入	0	200,000	200,000
3. 寄付金等雑収入	10,000	10,000	0
4. 前年度繰越	702,139	1,057,290	355,151
合 計	1,482,139	2,062,290	580,151

支出の部	第64期	第65期	差異
1. 事業支出	550,000	650,000	100,000
総会費	0	200,000	200,000
新入会員歓迎会費	200,000	100,000	▲ 100,000
ニュース発行	120,000	120,000	0
拓友会賞	50,000	50,000	0
在校生への補助	180,000	180,000	0
2. 管理費	285,000	325,000	40,000
会議費	60,000	90,000	30,000
印刷費	5,000	5,000	0
交通費	20,000	30,000	10,000
通信費	50,000	50,000	0
消耗品費	50,000	50,000	0
雑給費	50,000	50,000	0
雑費	50,000	50,000	0
3. 特別会計積立金	200,000	200,000	0
4. 予備費	447,139	887,290	440,151
合 計	1,482,139	2,062,290	580,151

特別会計

収入の部	第64期	第65期	差異
1. 前年度繰越	3,225,047	3,425,088	200,041
2. 一般会計より繰入	200,000	200,000	0
3. 雑収入	50	50	0
合 計	3,425,097	3,625,138	200,041

支出の部	第64期	第65期	差異
1. 次年度繰越金	3,425,097	3,625,138	200,041
合 計	3,425,097	3,625,138	200,041

受賞記録

日本熱帯農業学会 第134回講演会 学生優秀発表賞 受賞

須田美来さんが、2023年10月14日(土)、
「日本熱帯農業学会第134回講演会」にて
学生優秀発表賞を受賞しました。

タイトル：異なる草型を持つイネの
群落構造解析

発表者：須田美来

発表日：2023年10月14日(土)

日本唾液ケア研究会:第2回日本唾液ケア研究会学術集会 優秀ポスター賞受賞

曽根良太先生が、2023年11月26日(日)、
に神奈川歯科大学で開催された、日本唾液
ケア研究会第2回学術集会にて、優秀ポ
スター賞を受賞しました。

タイトル：高精度かつ簡便な唾液中分泌型
免疫グロブリン A の評価法の検討

発表者：曽根良太, 玉井伸典

発表日：2023年11月26日(日)